〔入門講座〕

韻鏡を使う人のために

馬淵和夫

この講座の読者は、韻鏡そのものを研究しようというかたがたよりも、韻鏡を国語学に利用すればどうなるか、またどういう風にして利用するものかということに興味のあるかたがたの方がおおいとおもうので、目標をそんなところにおいてのべてみたい。

まず、〔**韻鏡がわかる**〕ということが、漢字音がわかることであるかの様にかんがえる風潮があることからはなしをすすめたい。この風潮のよってきたるところは決してあさくはないので、旧来の日本における漢字音研究の中心課題が韻鏡研究であったことに起因するものとおもわれる。だから漢字音を研究するというと、すぐに韻鏡がひきあいにだされたものである。とおく江戸時代のことはしばらくおくとしても、明治・大正の国語学を推進せられた大矢透博士の音韻研究は、『韻鏡考』と『隋唐音図』に集約されているし、橘本進吉博士によってその端をひらかれた上代特殊かなづかいの本質究明にも、学者がただちにむかったのは韻鏡を利用するという方向であった。（望月世教氏「上代に於ける特殊仮名遣の本質に就て」〈日本文学論纂〉・三宅武郎氏「仮名遣の研究」〈国語科学講座〉・安田喜代門氏「上代における仮名遣」〈上代日本文学講座〉など）しかし一方中国では韻鏡とは無関係にヨーロッパ人の中国研究の最高業績として、カルルグレン氏（Bernhar Karlgren, スエーデン人。一九〇九―一九一二中国留学、ストックホルム王室科学院会員）が、『広韻』『切韻指掌図』『方言』などを資料として厖大な研究を完成した。（Études sur la Phonologie Chinoise 1915―1926, 趙元任は、羅常培・李方桂氏合訳『中国音韻学研究』・Analytic Dictionary of Chinese and Sino-Japanese 1923, その他多数。日本訳では、岩村・魚返両氏訳『支那言語学概論』に三篇をおさめる）これによって中国ではあたらしい音韻史の研究方法がひらけ、研究が躍進した。日本の学界も当然その影響をうけて、『韻鏡』の価値をみなおすこととなったのである。在来のたちばでは、『韻鏡』を万古不易の韻のかがみとかんがえ、いつの時代の漢字音でも韻鏡の図上にその位置をもとめればその音がわかるとしたものであるが、あたらしいかんがえかたでは、韻鏡といえどもそれはある一時代の製作によるものであり、その組織もある一時代の音韻組織に対する認識のあらわれであるし、そこにおさめられた字もある一時代の音

韻をしめしているにすぎないとかんがえるのである。文化史的な産物が歴史的具体性をもつことは当然であるから、韻鏡の価値もこのたちばからみなおさなければならないことも容易に首肯できよう。そうすれば韻鏡の価値がなくなるというのではなく、かえって韻鏡の価値があきらかにされるであろう。そこでつぎに、

〔韻鏡はいつつくられたか〕 という問題にはいろう。現存する韻鏡には序文があり、それによると、南宋の紹興三十一年（一一六一）慶元三年（一一九七）嘉泰三年（一二〇三）の三回にわたり張麟之というものによって刊行されたことがわかる。この序文というのは張麟之によって附されたもので、もとは四十三転の本図だけであった様である。張麟之はその序文にいう、二十才のときはじめて韻鏡を入手したが、五十年研究の結果もついに、だれの著であるか不明であると。そこで現在では著者も製作年代も不明であるとすべきである。しかしおなじその序文中に、「旧翼祖の諱敬なるを以っての故に韻鑑と為す。今祕廟に遷る。復古本名に従う」といっているところからすると、もともとは韻鏡といったのを、なかごろ韻鑑とかえ、嘉泰三年にはふたたび韻鏡と本名に復したというのである。そして韻鏡を韻鑑といわねばならなかったのは、翼祖（通説では簡恭皇帝で、太祖のちちにあたる）のいみなが敬で、それと同音である鏡をいんだからだという。そうとすれば、韻鑑となったのは宋初（九六〇）のことであり、もと韻鏡といったのがそれ以前とすると、韻鏡というものは唐末、五代の間にはすでに存在していたことになろう。このかんがえかたは不合理ではない。韻鏡と同様な図に七音略韻鑑というものがあり、張麟之よりも一時代まえの鄭樵の『通志』のなかにおさめられているから、まだそのころは鏡という字が使用できなかったことがわかる。また現存韻鏡がどの韻書によって塡字したかはさらに検討を要するが、まず広韻によったとかんがえてみるとして、広韻のできたのは大中祥符元年（一〇〇八）であるから、それ以前に韻鏡があったとしてもそれは広韻によって塡字した韻鏡ではないことになるが、広韻以前にも広韻の様な韻書はかずおおく存在していたのであるから、それらのうちの一書によっても現在の韻鏡と大差ないものができたはずである。隋の仁寿元年（六〇一）に陸法言らによって切韻が製作されてから、広韻が大成するまでに

長孫訥言箋注　郭知玄拾遺緒正更以朱箋三百字　関亮増加　薛峋増加　王仁煦増加　祝尚丘増加　孫愐増加　蕭宝文増加　裴務斉増加　陳道固増加

などの増加本があったはずで（広韻序文による）現在遺存するものも王仁煦「刊謬補欠切韻」をはじめ若干あるのである（『十韻彙編』）であるから唐末、五代の間に原韻鏡が作成されていたとしても不都合はない。問題は韻鏡の様な音韻組織の図がどの様な経路をとって成立したかを説明することにある。これについては唐末のものと推定されている『守温韻学残巻』というものがあり唐末ごろの音韻学の一端がのべられているので、これによって韻鏡の様な組織図が作成されるにいたる経路がかなりわかる様になった。（小西甚一博士『文鏡秘府論考』三沢淳治郎氏『韻鏡四等位の成立と反切門法の発生』『韻鏡入門』）

さて現存韻鏡と広韻とくらべてみると若干の相異点がある。これは原韻鏡のすがたをのこしているものか、あるいはまた後世の添削かということになると、これは大体後世のものであろうとか

んがえられている。

〔韻鏡と類似の韻図〕 さきにちょっとふれたごとく、韻鏡とおなじ様な韻図に七音略韻鑑というものがある。これは構成はほとんどおなじであるから、原韻鏡からわかれたものであろう。カルルグレンによっておもくもちいられた『切韻指掌図』は、治平四年（一〇六七）の司馬光の序文をもちその作であることをうたっているが、これは擬作であろうという説（大矢透博士『韻鏡考』）もだされている。全二十図で、頭音は、韻鏡とおなじく三十六にわけ、韻もおなじであるが、まとめかたにおいて内外がなく、開合についてのかんがえもちがう様である。全体の印象としては韻鏡よりも簡単である。これとおなじ様なものに『四声等子』というものがあり、製作年代は不祥であるが、やはり二十図三十六字母となっており、さらに韻のおおきなまとめである通攝と内転外転の注記がある。より後世のものであろう。韻鏡と切韻指掌図とはその目的とするところがちがっていたとかんがえられる。（三沢諄治郎氏『韻鏡の研究』）そこでこれらの図を比較検討して、その図の成立を歴史的に把握し、それによって当時のひとの音韻に対する認識の形式を理解する様にしなければならない。

〔韻鏡の組織〕 韻鏡の本図というのは、うえにみる様な図面四十三からなる。これをそれぞれ第一転、第二転……という様によんでいる。上掲の第一転の図について説明してみよう。まず図の右傍に内転第一開とあるのはこの図の標目である。図は同頭音のものはたてに、同韻のものはよこに排列してある。したがってひとつの字（たとえば風）はその字の属するたての列の頭音（唇音清としてまとめられる音）と、よこの段の韻（左欄にある東字の

韻）とをもっていることになる。たての頭音をまとめて一図にしたものが三十六字母の図で、韻鏡序中におさめられている。この三十六字母というのは、おそらく唐代末の音のあらゆる頭音を整理した結果作成された三十六のグループのことで、その一グループごとに代表する字があり、そのグループをよぶのにその字をよって幫母とか、滂母とかいい、これを声母という。声とは頭音のことをいう術語で、体音・尾音をまとめて韻というのに対する。この三十六字母を発音部位にわけて考察した図が三十六字母の図でつぎの様になっている。一行のもとに二母あるものはその位置する等位（後述）がちがうが、その位置は韻鏡ではわからないが切韻指掌図によってしることができる。それをしたにかいておこう。

字母	韻鏡注記	所属等位
脣音 清 幫	脣音重	一二四
非	脣音軽	三
次清 滂	脣音重	一二四
敷	脣音軽	三
濁 並	脣音重	一二四
奉	脣音軽	三
清濁 明	脣音重	一二四
微	脣音軽	三
舌音 清 端	舌頭音	一四
知	舌上音	二三
次清 透	舌頭音	一四
徹	舌上音	二三
濁 定	舌頭音	一四
澄	舌上音	二三
清濁 泥	舌頭音	一四
娘	舌上音	二三
牙音 清 見		一二三四
次清 渓		一二三四
濁 群		一二三四
清濁 疑		一二三四
歯音 清 精	歯頭音	一四
照	正歯音	二三
次清 清	歯頭音	一四
穿	正歯音	二三
濁 従	歯頭音	一四
牀	正歯音	二三
清 心	細歯頭音	一四
審	細正歯音	二三
濁 邪	細歯頭音	一四
禅	細正歯音	二三
喉音 清 影	喉音二独立	一二三四
清 暁	喉音雙飛	一二三四
濁 匣	喉音雙飛	一二三四
清濁 喩	喉音二独立	一二三四
舌歯音 清濁 来	半徴半商	一二三四
歯舌音 清濁 日	半徴半商	三

発音部位は現代の音声学からみても大体妥当とおもわれる。ただ牙音というのは現代ではつかわれないが、これは軟口蓋音にあたるとおもわれ、そうすると喉音の暁母、匣母とそれほどちがわない様である。しかし他の喉音影母・喩母が母音であることからみると、この暁母・匣母の方が牙音よりももっと奥の方で発音されていると感じていたのであろう。清・濁は無声・有声ということだけでは説明できず、次声、清濁などの解明にはまだ問題がのこされている。

これら声母の音価については中国音韻史の問題で、時代によって変遷のあるべきものであるからその方面の研究によらなければならない。しかしこの三十六の分類は声母の分類意識としてはもっともふるいものの方で、逆に中古音（隋唐音）や上古音（漢魏音）の音韻組織の解明に重大なてがかりをあたえるものでもある。声母の研究については諸書があるが、高畑彦次郎氏『周秦漢三代の古紐研究』・董氏『上古音韻表稿』〈歴史語言研究所集刊第十八本〉・李氏『切韻音系』〈語言学専刊第四種〉・カルルグレン氏 Études sur la Phonologie Chinoise（同訳本。またまとめたものは王力氏『中国音韻学』上にあり、三沢諄治郎氏『新訂韻鏡』にもある）などが歴史的考察をしている。その他多数ある。

つぎは韻の問題であるが、韻鏡は大体広韻の二百六韻によっているとかんがえてよい。二百六韻というのは唐代の韻を分類してえたもので、これには平上去入の四声ともはいっている。それぞれの韻を代表とする字（韻目）があり、東韻とか江韻とかいってそのグループをあらわす。この分類は当然時代によって相異があるべきものであるが、普通には広韻を標準にして、この字は江韻という風にいう。韻鏡はこの広韻二百六韻によっているとおもわれるが、韻のなまえに少異がある。たとえば去声で韻鏡韻目は敬であるのに、広韻では映となっていることの様なものである。そういうことから韻鏡のよったのが広韻以前の韻書ではないかというかんがえもでてくる。この二百六韻を四十三転に配分している。図中左端の欄の字がその韻目で、東とあるのが平声、董が上声、送が去声、屋が入声である。その各声をさらに四段にわけている。このこまかい四段を等位という。そこで問題は、各韻がどの様な音価をもっていたかということと、四等がどの様な区別をもっていたかということである。各韻がどの様な音価をもっていたかは声母とおなじく中国音韻史の問題であって、韻鏡だけで解決のつく問題ではないが、しかしまた韻鏡の四等と、内転、外転開、合ということがよくわかれば、それにつれてあきらかになるところもおおいのである。これらは両方からかんがえあわせていかなければならない。そしてこれら形式上の名目の解釈はいずれもいまだ定説をえないものであるが、開合については、合というのは主母音かあるいはわたりの音にuとか-wとかいう円唇性の音があるときにいうらしく、開とはその反対のばあいであるらしくおもわれる。内外の問題は古来やかましいところで諸説がある。（大矢透博士『韻鏡考』、大島正健博士『韻鏡新解』、羅常培氏『釈内外転』その他）おおくはまず内転と外転とに属する韻の推定音価の比較をおこない、それぞれに属する韻の共通性をとりだして内外の概念をきめようとするのである。しかしその韻の音価そのものは推定音価にすぎないところに問題があり、はっきりと内外の性格を抽出することは困難なのではないか。ところが最近

三沢諄治郎氏によって注目すべき説がだされたので紹介しておこう。（同氏『等韻図の二系統と内外転の意義』〈韻鏡の研究第一冊〉「韻鏡入門」）それによれば、

1　広韻の韻目において独用とか同用とか注記せられているが、その範囲内で一図を構成しているものを内転とする。

2　独用・同用の範囲外で一図を極成しているものを外転とする。

3　二等変韻（第三転の江韻と、第二十九、三十転の麻韻）を主体として一図をなすものを外転とする。（原説では一図として説明してあるが、紐の説明が面倒なので一図とした。これでも大体はあやまりでなかろう。）

というのである。この第一と第二の原則でほとんどのばあいが説明できて、しかも音韻の様な媒介物を要しないで、韻鏡と広韻との形式そのものから解釈できるところがこの説のつよみである。

最後は等位であるが、この解釈にもふたつのいきかたがある。ひとつは推定音の性質から帰納しようというもの、もひとつは図の構成原理の方からかんがえていこうとするものである。前者はカルルグレンの系統に属するひとびとの研究であるが、この方面からあきらかにされたことは三等が拗音をとることである。これは大体定説といってよいであろう。その他の等位については韻書に開発収閉などとある（呂維祺『音韻日月燈』一六三三）ことから口唇のひらきの広狭によるという説（大矢透博士『韻鏡号』もあるが、それは結果についての論であって、原理ではあるまい。また内転とは二等に字がないもの（歯音をのぞく）であるという説（『切韻指掌図検例』）も有力であったがこれも結果論である。これについても図の構成の方からかんがえた三沢諄治郎氏の意見は傾聴にあたいしよう。さきにのべたごとく、図中一行に二種の字母のあった音は、その字を頭音とする等位がきまっていたのである（たとえば、歯音中精清従心邪は一四等に、照穿牀審禅は二三等という様に）から、反切上字が作用していることがおおきいであろう。三沢氏は唐末の作とおもわれる『守温韻学残巻』を考察した結果、この残巻に歯音の軽母（二・三等）と喉音の一等字とは反切を形成せず、歯音の重母（一・四等）と喉音の二等字ともまた反切を形成しないということをのべているから、四等のはじめは「字母の定位（前述のごとく、どの字母は二三等であるかというきまり）を中心として反切語作成上の原則（この字を上字としたばあいはこの字は下字としては反切ができないなどということ）を定め、重軽（重軽の概念はまだはっきりしない）関係を一眼にみわけられるようにした」ものであったが、さらにそれに韻の直拗の区別がくわわってきて大体つぎの様な順序で等位をわけたのであろうとされている。すなわち、

1、韻書の分韻法を基礎として近似韻の群をつくる。

2、近似韻を直拗の二段にわける。（一等直音、三等拗音）

3、字母の区別を参加せしめて拗韻を二分する。（三等と四等）

4、分韻法により直拗の中間韻をたてる。（二等）

となって四等ができたとするのである。字母に区別のない行では、区別のある行を標準にしてならったのであろう。

こういう図式の解釈はまたさらに音価とも関係があるのであるから、両面から検討していかなければならない。この問題についてはさらに、大島正健博士『韻鏡新解』・大矢透博士『韻鏡考』・有坂秀世博士「カールグレン氏の拗音説を評す」〈国語音韻史の研究〉・王力氏『中国音韻学』上巻などに諸説があるから参看

せられたい。また音価の問題では前掲声母の項でのべた諸著もほとんどがふれているからこれについてみられたい。（ただし高畑氏のは『古韻研究』となる）

〔利用のしかた〕　つぎは図のうえに自分のもとめる字をみつける方法である。韻鏡図上のすべての位置は理論上からいって全部ちがう音であるはずである。しかし実際にはありえない音もあるから空囲もかなりあるのだが、そこにおかれている字はすべてちがう音である。そこで現実に図上にあらわれている字はさがせばみつかるわけであるが、その字と同音の他の字はいくらさがしてもないことになる。そこで図上にない字は、その字が図上のどの字と同音であるかをしらなくてはならない。それには広韻をさがせばよい。広韻は二百六韻によってわけた韻書であるから、その字がどの韻に属するかをしればその韻をすべてさがせばみつかるわけである。そして同音の字はすべて○で一括してあり、その○の直下の字がその同音字の代表となっていて、大体はその字が韻鏡図上にあるから、こうしてもとめる字が韻鏡図上のどの位置にあるべきかということがわかるのである。これは漢字の韻についてあまりくわしくない日本人には大変面倒であるから、広韻の字を画でひける様に作成された『広韻索引』（東京教育大学中国文化研究会編のもの、および拙著『韻鏡校本と広韻索引』第二部）を利用するのが便利であろう。そして韻鏡図上の位置がきまれば、縦横の関係から自然その音はあるわく内にはいってくるのである。

しかし前述したごとく、韻鏡の構成についてはまだ定説をえないものがおおいのであるから、ただ単に韻鏡図上にもとめる字の位置が決定しただけでは不十分で、あとは韻鏡の構成について理解をふかめなければならないということにおちつくのである。そんなに定説のないものなら韻鏡は利用価値がないかというにそうではない。漢字音について研究した結果が、韻鏡の形式面のはる部分と一致することがあきらかになれば、そこから双方の解釈に光明をもたらすことがありうるのである。ひとつの事実よりもふたつの事実の方がより解決にみちびくちからがおおきいのである。たとえば特殊かなづかいの音の問題において、甲類の字が一等四等に、乙類の字が三等にあらわれるということが発見されたとする。そこから特殊かなづかいというのは音韻の問題であるということが確定し、さらに甲乙の差は一等四等と三等の相違に対応するなんらかの国語音韻上の事実であることがしめされる。これは中国音韻史にとっても国語音韻史にとってもかかわりのある問題となり、相互に研究が進展することになろう。この様に韻鏡は字音の研究をしようというときにはいつもてもとにおいておき、これによって字音を整理し、音価をかんがえていけば大変有益となるものである。そしてそれによって韻鏡の構成についての学説をたしかめ、さらにあたらしいかんがえかたをつけくわえていくのが韻鏡そのものの研究ともなるのである。

参考書類はすでに所々で紹介したが、初歩的なものとしては

佐藤仁之助氏『韻鏡研究法大意』（東京神田　松雲堂）

三沢諄治郎氏『韻鏡入門』（神戸市灘区青谷町四ノ廿一　同氏自費出版）

などがあり、特に後者はすぐれたものである。なお韻鏡の諸本および日本における韻鏡研究の歴史については拙著『韻鏡校本と広韻索引』第一部、第三部を参看せられたい。

——東京教育大学助教授——